



歯学部附属病院から医歯学総合病院へ

新潟大学医歯学総合病院 副院長（歯科担当） 小林 正 治

新潟大学歯学部設立50周年、誠におめでとうございます。

新潟大学歯学部は、昭和40年4月1日に日本海側唯一の国立大学歯学部として設立されました。そして、臨床歯学の実践ならびに臨床教育の場として、附属病院も歯学部共に歩んでまいりました。

【歯学部附属病院の開設と発展】

昭和42年度に保存・補綴・口腔外科の3臨床講座が設置され、歯学部附属病院は昭和42年6月1日に開設されました。当時の記録をみると、医学部附属病院の外来に間借りする形で、診療設備は歯科ユニット7台と歯科用X線撮影装置1基、手術台1基のみで、診療スタッフも教官9名、看護師5名、薬剤部長、歯科衛生士、歯科技工士含めて計18名というものであり、開設当時のご苦労が察せられます。同年8月30日には、旧医学部附属病院跡に歯学部附属病院が開院し、昭和43年度に予防歯科と矯正歯科が加わり5診療科に、昭和44年度には歯科保存学第2講座と歯科補綴学第2講座が認められ7診療科となり、昭和46年には歯科診療部門では全国初となる言語治療室が設置されました。そして、昭和48年に第2口腔外科を加えて8診療科体制となり、同年7月5日には歯学部と歯学部附属病院の新築が落成し、名実共に資格面積を保有する附属病院が完成しました。私自身は、昭和52年入学の13期生ですので、歯学部ならびに歯学部附属病院黎明期のご苦労を知らずに教育を受けた世代ですが、今思うと私の学生時代も学内にはまだ昭和40年代の熱気が残っていたように思います。

昭和54年に小児歯科、昭和55年に歯科放射線科、平成元年に歯科麻酔科が設置され、11診療科体制となり、その後も特殊歯科総合治療部や病理

検査室、総合診療部、摂食・嚥下機能回復部、顎関節治療部が設置され、先端のかつハイレベルな歯科医療が行われてきました。しかし、大学院部局化や国立大学法人化が行われるなど、大学を取り巻く状況が大きく変化し、平成13年4月には11診療科を廃止し、4診療科（歯の診療科、噛み合わせ診療科、口腔外科、口腔保健科）体制に再編され、平成15年10月には、医学部附属病院と歯学部附属病院が統合して、新潟大学医歯学総合病院が設置されました。

【新潟大学医歯学総合病院歯科診療部門として】

医学部附属病院と歯学部附属病院の統合は、臨床医学の急激な進歩や先端医療の複雑化と情報開示、医療安全の機運の高まり、少子高齢化社会の到来、合理化に伴う公務員の削減などの社会情勢の大きな変化に対応し、医科と歯科のより緊密な連携による全人的医療の提供と更なる医療ニーズの変化に的確に対応することを目的として進められ、新潟大学医歯学総合病院として23診療科（歯科は上記4診療科）と18中央施設（歯科総合診療部と特殊歯科総合治療部を含む）、5院内措置施設（摂食・嚥下機能回復部と顎関節治療部を含む）で平成15年10月に開院しました。平成18年4月には摂食・嚥下機能回復部と顎関節治療部の院内措置施設が廃止され、摂食・嚥下機能回復部と顎関節治療部ならびにインプラント治療部が中央診療施設として設置されました。さらに、平成24年11月には病院全体の診療科が再編されて32診療科となり、歯科は予防・保存系歯科、摂食機能・補綴系歯科、口腔外科系歯科、矯正・小児系歯科の4診療科からなる現在の体制となりました。

歯科診療部門は、当初は統合前と同様に旧歯学部附属病院の施設で診療を行っていましたが、医歯学総合病院二期工事（東病棟）の終了に伴い、

平成18年1月に病棟と手術室が移転となりました。歯科病棟は東病棟3階に40床で稼働を開始し、手術室は医科手術室内に歯科が優先的に使用できる手術室を2部屋増設していただきました。移転当初は、問題もいくつか発生しましたが、口腔外科ならびに歯科麻酔科の先生方のご努力と医科ならびに病院事務の方々のご協力もあり、思ったよりもスムーズに診療を移行することができました。平成21年9月に三期工事が終了し、中央診療棟に手術部が移転し、さらに第四期工事の終了に伴い、平成24年11月26日に新しい外来診療棟が開院して、歯科系の外来診療部門はその4階と5階に移転しました。病院統合から9年の歳月を経て、外来も医科と歯科とが一つとなり、真の意味で医科歯科総合病院としての体制が整備されました。

外来診療棟4階は、歯科用チェア122台を用いて壁のない「緩やかな」境界線のもと各診療科を配置して外来診療を行っており、ワンフロアでの規模としては国内有数の歯科診療室となっています。診療ブースも共通性の高い設計とし、診療用キャビネットや器材にも統一が図られました。また、本院歯科診療部門の特色の一つである診療参加型臨床実習ならびに歯科医師臨床研修についても、歯科用チェア35台を用いて行っています。

外来診療棟5階には、歯科麻酔科外来（歯科用チェア2台）、歯科外来手術室（3室）、歯科言語治療室、歯科嚥下機能検査室、歯科エコー室、咬合機能検査室、歯科脳波検査室、歯科病理放射線診断室が設置されています。特に、歯科外来手術室では、いわゆる外来小手術と、全身管理下や鎮静法下での各種歯科治療が年間2400症例以上行われています。

【新潟大学医歯学総合病院の将来ビジョン】

平成28年4月に新大病院グランドデザイン2016-2021が発表されました。これは、社会的ニーズ・課題や当院の強み・特色を踏まえ、第3期中期目標・中期計画期間（平成28～33年度）終了時点で、当院がどのような姿であるべきか、そのためにどのような取組を行っていくべきかについて、その方向性を取りまとめたものです。

Vision 1では、「患者にやさしい高度医療の推

進と健康長寿社会の実現への貢献」をテーマとし、超高齢社会における複数の疾病を抱える高齢者に対する総合的・包括的な医療や、身体への負担が少ない低侵襲医療を目指しています。その一つが、医科歯科連携の強化・拡充です。現在も医療連携口腔管理チームを中心に医科入院患者も含めて周術期口腔機能管理や口腔ケアが行われていますが、「連携推進歯科治療部」を立ち上げて医科歯科連携の強化・拡充することが、安心安全な医療の提供を含む本院の機能・特色の強化に繋がるとともに、地域保健医療推進部等との連携により地域医療構想下での包括的医療連携体制の構築にも貢献できると考えます。

Vision 2では、「グローバルな視点やリサーチマインドを備え、高度先進医療・地域医療においてリーダーシップを担う高度専門医療人の養成」をテーマとしています。当院歯科における臨床研修・臨床実習は、研修歯科医や学生を担当医の一人と位置づけ、診療参加型で行われる点が最大の特徴であり、全国モデルとなる充実した歯学臨床教育を実施しています。

Vision 3では、「本学の持つ各分野の研究能力・実績の実践医療への導入と、医療イノベーションの創出への貢献」をテーマとしています。歯科においても、再生医療をサポートする細胞プロセッシングセンター（CPC）と連携し、培養骨膜シート移植による歯周病治療及び顎骨再生治療、培養口腔粘膜移植による口腔癌術後再建療法への応用などの実績を持ちます。今後も、新たな医療イノベーションを創出していくことが大学病院の使命と考えます。

近年、病院運営において経営戦略の重みが一層増し、臨床にも成果主義が取り入れられ、その達成を目標に努力することが求められています。もちろん、健全な病院運営を継続するためにも経営戦略は重要であります。大学病院の使命である先端的で高度な医療を提供するとともに、優しさや思いやりに満ちた医療の提供が大切であると考えます。患者に信頼され、愛される病院であるために、われわれが何をすべきかを考えながら、これからの病院運営に関わっていきたいと思います。